令和３年度第２回清瀬市総合教育会議

令和３年度第２回清瀬市総合教育会議が令和４年１月２１日午後２時に招集された。出席委員、議事の大要は次のとおり。

1. 日　　時　　令和４年１月２１日（金）午後２時から

2. 場　　所　　清瀬市役所本庁舎　庁議室

3. 出　席　者　　瀬　谷　真　　（清瀬市副市長）
坂　田　篤　　（清瀬市教育委員会教育長）
宮　川　保　之（教育長職務代理者）
粕　谷　衛　　（教育委員）
兵頭　扶美枝　（教育委員）
土　屋　佳　子（教育委員）

4. 事　務　局　　今　村　広　司（企画部長）
粕　谷　靖　宏（教育部長）
戸　野　慎　吾（企画課長）

5. オブザーバー　清瀬市立清明小学校　川勝校長
きよせラボ　　柿添代表

6. 書　　記　　立　川　恭　子（教育総務課）

議事日程

1. 開会

2. 協議事項

(1)「学校と地域との協働～コミュニティハウスの実践研究を通して～」

(2) その他

閉会

午後２時　　開会

【開会】

（戸野企画課長）
　それでは定刻より少し前でございますけれども、皆さまおそろいでございますので、ただ今より令和３年度第２回清瀬市総合教育会議を開催いたします。なお本日は渋谷市長が体調不良により欠席をさせていただいております。それでは瀬谷副市長、よろしくお願いいたします。

（瀬谷副市長）
　はい。皆さん、こんにちは。

（一同）
　こんにちは。

（瀬谷副市長）
　本日は大変お忙しい中、ご多忙のところ、ご出席いただきましてありがとうございます。本日の協議の事項につきましては、「学校と地域との協働～コミュニティハウスの実践研究を通して～」ということでございます。本日のテーマを議論するに当たり、皆さまの専門的な見地からの忌憚のないご意見を頂戴し、議論をしてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。
　では、ここから先は坂田教育長に進行をお願いしたいと思います。皆さま、よろしいでしょうか。よろしくお願いいたします。

（坂田教育長）
　よろしくお願いします。改めまして、こんにちは。

（一同）

こんにちは。

（坂田教育長）
今、副市長からテーマのご紹介がありました。学校と地域との協働ということで、今教育委員会では非常に力を入れている取り組みの一つでございます。このことは教育委員会事務局だけでは具現化できるものではありません。市長部局と手をつなぎながら、やはり手を取り合いながら、共に歩みながら、進めながら、取り組むべき事柄であると認識していますので、今回私どもにこのような機会を与えていただきましたことを、まずはお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。
それでは最初に柿添代表もいらっしゃいます、川勝校長もいらっしゃいますので、自己紹介を改めてやらせていただければと思います。兵頭委員から、申し訳ありませんが。

（兵頭委員）
はい。兵頭です。清瀬で三小、四小と校長をして、そしてまた今教育委員の立場で関わらせていただいています。地域連携には非常に関心を持ってきたつもりです。よろしくお願いします。

（坂田教育長）
学校支援本部を市内で最初に立ち上げられた校長先生でいらっしゃいます。元校長でいらっしゃいます。じゃあ土屋委員。

（土屋委員）
はい。土屋佳子です。どうぞよろしくお願いいたします。日本社会事業大学専門職大学院でスクールソーシャルワークの授業の担当をしております。スクールソーシャルワーカーや医療ソーシャルワーカーの人材育成に努めているところです。専門も教育福祉で、コミュニティの問題も扱っておりますので、よろしくお願いします。

（坂田教育長）
土屋委員とは東京都の審議会で一緒にならせていただいて、そのときも地域の官民連携のような議論でしたよね。そういう議論を重ねさせていただいて、この方は魅力だなと思ったから、急に無理なお願いをしました。よろしくお願いします。では柿添代表。

（柿添代表）
　はい。座ったままで失礼します。改めて、こんにちは。NPO 法人きよせラボの代表を務めております柿添と申します。本日はお招きいただきまして誠にありがとうございます。
　今ちょうど兵頭委員というか兵頭先生からも、私も清瀬に来てもうそろそろ 13 年目ぐらいなのですが、上の子どもが第二中学校、下の子が第三小学校です。清瀬に引っ越してきてから第三小学校に通い始めてから、円卓会議とか、cc 本当に 1 年目の入れ替わりのときだったのですけれども、そのときにこれから議題になる地域協働とかその基本となるところを第三小学校で私はいろいろと接する機会があり、本日お招きいただいたのかなと思っています。本日はよろしくお願いします。

（坂田教育長）
　柿添代表とは私は PTA 会長のときからのお付き合いですね。非常に行動力のある方で、必ず地域と学校との連携の場にはどこかで顔を見るという方で、本当に柿添代表の顔を見ない日はないというような方ですので、非常に今ラボの運営を担っていただいております。では川勝校長、よろしくお願いします。

（川勝校長）
　清明小学校校長・川勝です。よろしくお願いいたします。

（坂田教育長）
　川勝校長をちょっとご紹介申し上げますと、本職はもう 3 年目になる？

（川勝校長）
　はい、そうです。

（坂田教育長）
　3 年目だね。ここだけの話ではないですけれども、清明小学校の校長先生をやられていらっしゃって、長らく清明小学校の学力向上が課題だったのです。それをこの 2 年間で本当に飛躍的に改善をされた。本当に経営力を見事に発揮されて、学校の今立て直しをやっていただいている校長先生です。

なぜ今日お呼びしたかというと、きよせラボを最も市内で活用している学校であるというところで、実践レベルでの立場からよろしくお願いします。

（川勝校長）
よろしくお願いいたします。

（坂田教育長）
では粕谷委員。

（粕谷委員）
はい。着座にて失礼いたします。教育委員の粕谷と申します。普段は市内の幼稚園で園長を務めております。先ほど柿添代表のほうからお話があったのと同様に、私も子どもが市内の中学校と小学校に通っている現役の親でありますので、今日のテーマに関してもまさに私事、自分事として非常に興味があるわけです。ただ知識はちょっと、あまりないかもしれないので、皆さんからの意見で勉強させていただければなというふうに思っています。よろしくお願いいたします。

（坂田教育長）
粕谷委員はわれわれ教育委員会の中では保護者枠という枠の中で委員をお願いしています。それとともに今ご紹介があったように幼稚園の経営もやっていらっしゃいますので、保幼小連携、小学校に入る前の教育とどういうふうに小学校が連携していくのかというところでは、さまざまなご実践とご意識をお持ちでいらっしゃいますので、この事業の中では本当に活発に意見を出していただいて、われわれの原動力になっていただいています。では、最後に職務代理者。

（宮川職務代理者）
はい。宮川でございます。大学で教員として仕事をしておりますが、私が関心を持っている言葉を申し上げますと、やはり一つはまちづくりということなんです。コミュニティデザインといったような考え方がありますけれども、こういうことで成功している自治体もあちこちありますし。また清瀬市については本当に若かりし頃からいろいろと関わりがありまして、特にジョセフ・シークさんのこととか、それから武谷さんですね。武谷さんのご主人は物理学者でちょっといろいろと関与をすることがあったものですから、そういうことで清瀬にはすごく興味関心を持っています。まして

清瀬の歴史を見たときに、まだまだ残されているというか、それをもう一度ここでどうやって再興させるかということによって、この清瀬というまちが本当に魅力あるまちになるんじゃないかと思って仕事をさせていただいています。どうかよろしくお願いいたします。

（坂田教育長）

職務代理者は私が指導主事になったもう 20 年、25 年前、20 年前ですか。そのときに都庁にいらっしゃって私の指導教官でした。十文字大学にいらっしゃると聞いて、無理を承知の上でなっていただいたというところです。

というメンバーで、お 2 人は今日オブザーバーですけれども、この 5 人で月 1 回必ず議論を重ねています。どこぞの自治体では教育委員会会議の形骸化ということがいわれていますけれども、手前みそになりますが、本市の教育委員会会議はどこに出しても恥ずかしくないだろうと自負をしています。本当に活発に意見を交わし合いながら、時には口角泡を飛ばして議論をしながら、少しでも良いものをつくっていこうというエネルギーを持って議論を重ねているところです。

今日も実は午前中、定例会議がありまして、そこでコミュニティスクールの規則について決裁を受けたんですけれども、そこでも非常に活発な議論を交わして、少しでもいいものをつくろうとわれわれは今努力をしているところです。今日はよろしくお願いいたします。

それではまず私から、今日副市長からご紹介のあった学校と地域との協働というところの主題設定の理由について 10 分間ばかりパワーポイントを用意しましたので、ご覧いただければと思います。

（パワーポイント資料を上映）

なぜ教育委員会は地域との協働に力を入れているのかということです。

われわれ教育委員会のミッションは常にこの 5 人では確認はしているところなのですけれども、最初は教育基本法第 1 条ですから非常に堅苦しい言葉になっています。人格の完成うんぬんかんぬんと書いてありますけれども、これはいわゆる人づくりです。自分づくり、社会づくりができる人を育てていこうという、これはもう全国共通してわれわれが担うミッションです。

2 つ目は、やはりこれは清瀬市の教育委員会ですから、われわれは教育を通して長期総合計画の実現を図る。これはわれわれのミッションであろうと常々思っています。教育を通して「手をつなぎ　心をつむぐ　みどりの清瀬」を実現していくということです。平たい言葉で言えば、人づくりとまちづくりと、今職務代理者からまちづくりの話がありましたけれども、教育を通したまちづくりをやっていこうというような考

え方です。
　なぜまちづくりが教育と関連があるのかというところですけれども、地域と協働することによって、ここに書いてあるロジックが成立すると思っています。地域の方々が学校に集う。そして、子どもと関わる仲間として互いに顔見知りになる。子どもから元気や生きがいを得る。元気と生きがいの輪が広がって絆で結ばれたまちになる。だいぶショートカットしてこれはロジックを作っていますけれども、こういう基本路線があるから、学校と地域はやはりまちづくりのためにも必要であるということです。
　これは本市公共施設再編と全く同じコンセプトであろうと思っています。それを概念的に表したのがこのポンチ絵になるんですけれども、右側ブルーの項目がまちづくりに関すること、イエローのほうが学校づくりに関することです。一番下に学校と地域が手を結ぶことによってさまざまな人が学校に集うようになって、まちづくりのほうでは子ども支援で顔見知りになって元気になって、自分たちの手でという市民性が醸成されて、孤立家庭への支援の手が差し伸べられ、ネットワークが徐々に広がって、いいまちができると、こういう流れです。
　学校づくりのほうでは、さまざまな人が学校に集うことによって、学校では教えてくれないことをたくさん学んで、協力者が増えることで学校の働き方改革も進んでいく。教員の指導力が高まるということです。それで子どもの力がどんどん伸びて、学校と地域が信頼できる関係性になって学校がつくられていくと、こういうロジックをわれわれが満たしていく。学校づくりのところについては川勝校長から、またまちづくりについては柿添代表からも話を後ほど頂ければと考えております。
　ちょっと具体的なところに踏み込んでまいりますと、こんな効果が期待できるというところを挙げてみました。地域と協働することによって子どもたちがこれまで以上に賢く豊かになるということ。
　それの１つの例が「清瀬子ども大学」という取り組みを今教育委員会では進めています。簡単に言ってしまえば、清瀬にある資源を活用して、子どもたちが学校では学べない学びを子どもたちに与えていこうという取り組みです。文化、医療、自然、科学、農業、全部これは清瀬のキーワードになるところだと思いますけれども、これらの資源を活用した講座を開いているということです。年５回程度講座を開いて、それから各分野の専門家や大学教官等が講師になり、希望者が土曜日や休日に参加をして関心のあることを選択すると。
　実際に今年度トライアルとして３つの講座を開いています。一番左が薬学の部ということで明治薬科大学と協働して、このような場を設定しました。真ん中は清瀬子ども大学・理科の部です。これは一般社団法人のディレクトフォースという、これは板橋を拠点に持つところなんですけれども、お力を借りて子どもたちが 50 名ぐらい集まって実験をやりました。一番右側が子ども大学・音楽の部ということで、演奏家の派遣会社からの協力を頂きながらこれは進めたものです。
　これらは繰り返しになりますが、学校ではなかなか学ぶことができないプログラムでした。だから子どもたちの学びが充実していることは間違いありません。これは地

域との協働ができないと、なかなか進まないことであろうと思います。これは豊かな心を育てる上で、地域との協働がどうしても不可欠であるということを表しているわけです。

一番左側です。評価者ではない第三の大人と触れ合うことができるということです。これは親でもない教師でもない第三の大人です。真ん中は学校と地域との協働によって、共に汗を流す活動ができると。また自分は守られていると実感できる体験を得ることができると。

左側にいきますと、社会の仕組みの中に身を置くことで、大人というのは大変なんだなということに気が付いていくということ。また真ん中です。地域をフィールドとする自分が社会に役立っていると実感できる活動が行えるということ。親でも教師でもない第三の大人から褒められる、認められる活動が行えるということ。

これらによって子どもたちは、こういう意識を持っていきます。学校では教えてもらえなかったさまざまなことが面白かった、親にも先生にも言えないけれども地域の〇〇さんなら相談できそうだ。どの人たちも誇りを持って生きているんだな、あんな大人になりたいなと大人の背中から学べる。これは最近失われていることですけれども、それが可能になる。地域の〇〇さんから教えてもらったものを、もっとできるようになりたい。これは学習への動機付けです。清瀬はすごい人たちがいっぱいいるんだ。これは郷土愛につながります。

左にいきます。たくさんの人に褒められた。自己肯定感の高まりです。また、大人は大変なんだという社会性の目覚めもあります。

下の段にいきます。安心・安全です。道でたくさんの人が声を掛けてくれるようになった。また真ん中です。将来〇〇さんのような仕事に就きたい。これはキャリア教育になるわけです。あとは最後に学校で知り合った〇〇さんたちと道で会ったらあいさつができた、とても気持ち良かった。これは、人間関係はすてきだなということを学ぶ場です。こういう機会を与えてあげることができるということです。

もう一つ、子どもにとってとても重要なことは、地域と協働することによって命を守ることができるということです。例えば自分たちを見守ってくれる存在が地域の中にはたくさんいるということ。命の尊さを語ってくれる存在がいるということ。そんなことしては駄目だと厳しく注意してくれる存在がいるということ。またハンセン病資料館のように命の尊さに気付かせてくれる施設があるということ。大林組研究所のように命を守る必要性を体感できる施設があるということ。これらは全て学校教育の中だけではできないことです。地域との協働があるがゆえ、できることであって、地域と協働することによって、より一層子どもの命を守ることができるということです。

実はそれがかなわなかった事例がこれです。2015 年に大阪の寝屋川市で中学 1 年生が殺されたという事件は皆さんの記憶に新しいところではないかと思います。星野君という子と平田さんという女の子、この 2 人が外出をして夜の夜中まで寝屋川の商店街を歩き回っていたけれども、誰一人大人が声を掛けなかったということです。だから、これは彼らが命を失ってしまったのです。ここでもしも、この彼ら 2 人の姿を

見た大人が「君たちどうしたの？　早く家に帰りなさい」と言える地域だったら、この子たちは命を失わずにすんだということです。

さて、地域にどういうような効果が期待できるのかということです。これは安心・安全なまちがつくられるということです。あいさつが交わされるまちは犯罪が少ない。先ほどお話ししましたが、学校を核にして地域の人々が集まってきますので、そこで知り合いになる、コミュニケーションが発生するということです。このあいさつがコミュニケーションのスタートですので、これが交わされるまちは犯罪が少ない。

これは、実はデータがあります。これは警視庁のデータを引っ張ってきました。犯行を諦める要素、これは空き巣等々なんですけれども、声を掛けられたということが63％で一番大きな理由になっています。これはコミュニケーションが活発な地域には犯罪が少ない、抑止力があるということが言えることになると思います。学校というのは地域の人たちが集まりやすい環境です。集まりやすい環境ですので、そこで出会って、このあいさつのネットワークの輪を広げていくということは、まちづくりにもつながるということです。ところが現代はこういう時代です。これは神戸新聞の教育欄から引っ張ってきました。ちょっと読み上げます。

住んでいるマンションの管理組合理事をやっているんですが、先日住民総会で小学生の親御さんから提案がありました。「知らない人からあいさつをされたら逃げるように教えているので、マンション内ではあいさつをしないように決めてください」、理事会でこういう発言があったんですね。「子どもはどの人がマンションの人なのかどうかは判断できない、教育上困ります」と。すると年配の人から意見が出た。「あいさつをしてもあいさつが返ってこないので気分が悪かった、お互いにやめましょう」、こういう結論に達してしまった。その告知を出すということですが、この筆者は世の中変わったなと理解に苦しんでいますと。

こういう事実があったという投書を引っ張ってきました。こういう実態が全国あちらこちらで起きています。それを知った中学生が、これも事実なんですが、これは私の体験談です。こういう取り組みをしております。

私が以前いた自治体でのこれは実践例です。中学校の生徒会があいさつキャンペーンをやることになった。生徒会が全校生徒にあいさつを交わそうと訴えて、趣旨に賛同してくれた生徒にはブルーのリボンを配ることにした。そのブルーのリボンは、ほんの二束三文のお金でできるとPTAが用意してくれた。リボンを付けた生徒が進んであいさつをする約束にした。リボンを付ける生徒がどんどん増えた。

生徒会はこのプロジェクトを保護者に広げようと保護者に訴えた。多くの保護者が賛同してリボンを付けてくれた。この取り組みを知った自治会長、その学校の自治会ですね。ぜひ自分たちの自治会でもやりたいと生徒会に申し出て、生徒会はお偉いさん方が集まる会合に出向いて説明をした。この中学校の学域では見ず知らずの者同士であっても、ブルーのリボンを付けた地域住民があいさつを交わすようになったということです。生徒もリボンを付けた大人に対しては安心してあいさつができるようになった。中学生がまちを動かした事例です。

これはお分かりいただけると思いますが、学校行事の中だけではできないことです。地域を巻き込んで、地域が一体になってあいさつの運動に取り組んで、犯罪を少なくしていく、元気になるという取り組みです。これは実際にあった取り組みです。

もう一点、地域と学校が協働することによって子どもと触れ合う。子どもというのは非常に不思議な力があって、人々に元気を与える力があるんです。これはある人の学説によると、子どもは邪気がないからだというふうに言います。無邪気だと。邪気がないものと関わることは、エネルギーを宿すことになるとその方はおっしゃっていましたけれども、とにかく元気だと。

ご高齢の方は、特にそうですね。子どもに「おじいちゃん、ありがとう」と言われただけで本当に元気になるんです。「よく分かったよ」なんて言われるとうれしくてしょうがないと、皆さん口をそろえておっしゃる。生きがい・やりがい・役立ち感が生まれるということです。人生100年時代でこれは最も大きな健幸（けんこう）を保証していけるものではないかと思います。すなわち、子どもと関わることによって健幸都市・清瀬、生きがいのあるふるさと・清瀬、手をつなぐまち・清瀬が出来上がるということです。

これまで本市では、この役を学校支援本部のコーディネーターの方々が担ってきました。ご存じのとおり学校支援本部というのはマンパワーで運営するものです。ですからネットワークなんです。

ところがそのネットワークを駆使しても、どうしても集う場所がない、学び合う場所がない。いや、うちは公民館がないですけれども、図書館でも児童センターでもあるじゃないかと言われるかもしれないけれども、子どもは足が遠いです。一番近い足を運べるのは学校なんです。地域の方々も学校は入りやすい。防災の拠点ですし、わが母校でもあるし、おらが学校でもあるからです。

そこで今回、東京都と連携をして清瀬中学校内にコミュニティハウスを建設したわけです。ここには地域の方々が集まって、子どもたちが集まって、一緒に学び合ったり高め合ったりするような機能、もしくはコミュニティハウスから出張していろんなスペースで活動するという機能、関わり合いの場として今コミュニティハウスが機能しているということです。

先ほどもお話ししましたが、これは本市の公共施設再編のコンセプトと全く同じコンセプトです。本市の公共施設は学校機能とコミュニティ機能を一体化して複合型の公共施設を造っていこうという考え方で、まさに清瀬中学校は学校の中にコミュニティ機能があるということです。実はこれは東京都では初の試みのものですので、先行事例が少ないのです。われわれが一番モデルにしたのが横浜市の東山田中学校というところにコミュニティハウスがあるので、そこに柿添代表も一緒に私も視察に行ってきました。

この学校は学校の校舎内にコミュニティハウスを造っているということが特徴です。これは新しい手法なんです。2002年から開校舎が行われているけれども、その開校当時からこのコンセプトを掲げて校舎内にコミュニティハウスを造ろうというよ

うなことで設計段階からあった学校です。

中央にあるようなスペースを持っていました。地域のために、もしものための災害食講座みたいなものも開いている。これは200円取っているんです。これはいわゆる自主財源を確保しようということです。ここの東山田中学校のコミュニティハウスは、販路も持っていますので、実は行政からの支援がどんどん減っていっている、減少させていっているという理想的なスタイルです。もちろん建設当初は、これは行政がちゃんと支援をしましたけれども、軌道に乗るに従って行政・自治体からの補助金は減額されていると。

左側の写真は子どもたちを含んだ地域との学び合いの場、活動をしている生きがいの場というところです。実は私は今日も持ってきたのですが、こういう本が出ていました。この本は東山田中学校のコミュニティハウスの初代館長である竹原和泉さんという方が、この一員になっているんですけれども、コミュニティハウスの立ち上げのこと、もしくは現在の機能化させていることの裏話が非常に多く書かれていて、今度これを使ってコーディネーターの方々の勉強会をやろうと思っています。これを読み合わせしたり、この筆者のどなたかを呼んでお話を聞いたりというような学び合いの場をつくろうと思っていますが。私のところにあるんですけれども、ちょっと見にくいので私が読ませてもらいます。

「学校と地域、社会をつなぐためのツールは多岐にわたりますが、人が集い学び合う空間としての場の重要性が認識されるようになりました」と。今までは場がない中で活動していたのですね。真ん中です。「1994年、横浜市でスタートしたコミュニティハウスのコンセプトは地域活動の場、生涯学習の場、学校と地域を結ぶ場というものでした」と。さまざまな、いろんな啓発を受けるような言葉、事例がたくさん載っているので、ぜひこれをお読みいただければお分かりいただけると思います。

われわれは具体的な取り組みについてはなかなかお話できませんので、今日オブザーバーでもお招きした柿添代表と、それからフル活用している川勝校長先生から活動の詳細は報告を頂こうと思っています。

最後のシートです。今後の展開ですけれども、令和4年度いっぱいは東京都教育委員会と東京学芸大学が継続契約を結んで、共同研究を行いました。その中で東京学芸大学がこのハウスの運営委託をきよせラボに行ったということです。われわれ清瀬市教育委員会も入りながら、現在さまざまな共同研究を進めているところです。これはただし令和4年度いっぱい、令和5年度以降の取り扱いについてということです。これは教育委員会の思いです。学校を地域コミュニティの核として位置付け、複合型・多機能型の施設とするという本市公共施設再編のコンセプトによって清小と八小は建設されるわけです。その新校はどうしても成功事例にしなければいけません。

今まで本市では学校施設の中に公共スペースを入れていくという考え方はなかったわけです。新しい取り組みなのです。新しい学校なんです。絶対にこれは成功させなければいけない。次につながっていかなくなっちゃうわけです。そのための準備期間が絶対に必要です。令和5年度から八小・清小の新校の完成時までということです

から、ぜひコミュニティハウスの機能継続を教育委員会としては強く希望しています。これはわれわれ5人の思いです。ということでお話をさせていただきました。

今日これから議論に移りたいと思うんですけれども、学校と地域との協働が子どもの育成やまちづくりに与える効果とはどういうものがあるのか、学校支援本部やコミュニティスクール等の取り組みを視野に入れて議論していきたいと思います。

2点目はコミュニティハウスの持つ可能性と今後への期待というところで、清小・八小の新しい学校づくり、ここと密接に関係がありますので、これを視野に入れて議論を重ねていきたい。今日は結論が出ないかもしれません。でも私は議論することに価値があると思っていますので、ぜひ活発な議論をお願いできればと。これにこだわらず、その他ということで自由にテーマを設定していただいて結構ですので、ぜひあと1時間ですけれども、有効な時間を過ごさせていただければと思っております。ということで私からの説明は以上でございます。ありがとうございました。

では、これから議論に入りたいと思います。まず感想を頂きましょうか。兵頭委員から、この私の問題提起をご覧いただいた上での感想をお願いします。

（兵頭委員）

私が今の教育長のこのプレゼンの中で一番思うのは、場の必要性ということです。やっぱり地域の人々を取り入れていくにしても、そういう場があることによって非常に入りやすくなるという気がします。

これはコミュニティハウスができるまでは、本当に何とかやりくりを校内でできるところは、そういう支援本部が活動できる教室みたいな場所をつくったりもしましたけれども、やはりそういうことが難しい環境も非常に多いと思うんです。この今のコミュニティハウスが清中の敷地内にできて、それが非常にいろんな活動をされている状況を見ると、本当にこれが市内のいろんなところでも展開できるし、また地域の人が来やすい場所といいますか、また学校の中に入るのとまた違う環境ですけれども、身近な存在になっていくのかなと思っています。

そういう意味で、私も東山田中学校に見に行ったこともあるんですけれども、それは清瀬の校長会でこういう先進事例を見に行こうということで、もう10年ぐらい前だと思いますけれども行きました。

その東山田中学校は地域スペースの部分と学校の部分との間というか、真ん中に位置するような場所にあって、非常に機能しているという印象があったんです。そういうふうな場をつくるということが非常に地域の力も取り入れやすいし、地域との協働というのも第一歩として、すごく形から入るというイメージがあるかもしれないけれども、必要なことだなということを感じています。

だから清小・八小が新しくそういう機能を持った多機能のそういう複合施設になるという話を聞いたときにも、そこにコミュニティハウスを設置することで、今の学校支援本部がさらに広まりを持った活動ができていくのかなと思います。教育長の話の

中にもありましたが、子どもたちの成長にも非常に私は、教師だけでは与えられないいろんな視点や資源があって、地域の力を取り入れない方法はないなと思いますし。また地域の方も学校の中でそういう場所があるということは役立つという、そういう意識をますます地域に、定年後じゃないですけれどもそういう方が多くなっていくこの時代に、そういう自分の存在感みたいなものを地域の中でも発揮できるというのは、どちらにとってもいい関係なんじゃないかなと感じています。感想としてはそんなところです。

（坂田教育長）
　はい、ありがとうございました。ちょっとご発言いただきますけれども、実はこの本の中にこういう一文があるんです。「たとえ箱ができても、そこに魂が入っていないとコミュニティハウスは機能しません」と。この魂を今入れてくださっているのが柿添代表だと思うんですけれども、この私のプレゼンを見た感想を。

（柿添代表）
　やはり東京に来て、私は元々生まれは福岡県、九州のほうで小学校・中学校と過ごしていまして、そのときから私は学校と地域が離れているものだとは感じたことは一回もなくて。改めて今学校の現状を見たときに、学校と地域が手を結ぶ、これからの地域協働とあるんですけれども、元々今離れていたのかなと改めて思いました。
　そもそも学校は昔からずっと地域とつながっていた場所じゃないかと私は思っていました。それが形は違うけれども意識的に学校が、今例えば防犯の面とかいろいろなことで学校に通いづらくなる。いろんなことがあると思うんですけれども、そもそも学校というのはそこに通う先生自体も職員としては働きに来ていますけれども、そういう意味では一般の会社でも企業に勤めて、でもそういう地域貢献的に勤めている会社の周りの地域とは、また良くする関係がある。今ここに通うそもそも子どもの保護者自体も地域の人なので、そもそも学校は地域そのものだと私は思うんですけれども。
　なので、そこの地域そのものの学校を良くすることは、子どもが義務教育で通っている間すごくここで安心して過ごせる場所があるということは、結果的にはその地域に値する保護者、ある意味現役世代ですよね、そこをこれから担う人たちが清瀬でここを良くしていきたいという場所になると思っています。

（坂田教育長）
　ある意味ではその場、象徴がコミュニティハウスであるんじゃないかと思うんですけれども。まだ象徴になり得ているかどうかというのは話は別ですけれども。そこら

辺についてはどうですか。

（柿添代表）
　場所として、今、場として、面としての物理的なところはもちろんあると思いますし、清瀬に住んで感じるところは、もしもほんと点々とコミュニティハウスがあってもいいのかなとも思うところもありますが、やっぱり少子高齢化で人が減っていっているという現状を鑑みると、今のコミュニティハウスに集約して、共有財産みたいな人も物もというところがあることで。いわゆるほんとは清瀬中学校の中にありますけれども、これから後でお話が出てくるような清明小学区の地域、旭が丘とか。私はそもそも竹丘に住んでいますが、こちら側から向こうに支援に行く方たちがどうしても、人がマンパワーとか支援本部のコーディネーターさんもいらっしゃいますけれども、集約するという意味において、この概念的なコミュニティハウスを活用できるというところが、今までPTAとしていろいろな活動も見てきましたし、地域に住んでいる一本人としても、学校は今までだと、何というんですか言葉が出てこないですが。学校応援団と言ったらいいのかもしれないですし、他の地域にあるかもしれないですが、そこに行けば学校に協力できる何かがある、生まれる何かがある、地域にそこに行けば何かが生まれるというのがここのコミュニティハウスだと感じます。

（坂田教育長）
　なるほど、何か生まれる場所。その辺の何かというのが、校長先生に後で聞きたいんだけれども。宮川職務代理者は学校教育の歴史をずっと学んでいた、研究されていらっしゃる中で、先ほどもご発言があったんですけれども、まさに同じことをおっしゃっている。地域の中の学校というのは今までは当たり前だったと。だから、そこら辺のお話を職務代理者からお願いします。

（宮川職務代理者）
　はい。それもすごく大事なことだと思うんです。教育長のご説明の中にも、おらがまちのおらが学校という、これはすごく大切な文化だと思うんです。海外のいろんな教育事情を見ている中で、こういう文化を持っている国は、やっぱり少ないなと。だから日本は教育で成功しているんだと思っているんです。
　じゃあ、次の時代は人工知能による時代。この時代を生き抜く人たちを育てる教育をしていかなくちゃならない。そうすると柿添さんのような方々がたくさん増えて、そして言わば目指していらっしゃるであろう自立経営というのかな、そこにいくような社会に変えていかないと、行政の仕事、企業の仕事、企業が金もうけ、行政は得た資源に基づいて市民サービスをしていく、もうその世界は限界に来るんだろうと。

そうしたときに、今はやっぱり学校というものを多機能型にしていくことによって、たくさんのいろんな立場の方がそこにこぞって、子どもも学ぶし、おじいちゃんやお父さんやお母さんとかという人と一緒に学んでいく中で、これも教育長のパワーポイントにありましたけれども、「こんなことしちゃ駄目」と言ってくれる人がいない社会は、学校という今のあるような何か分かったようなことを教える場所に過ぎない。だから東大前で人を殺傷するようなことが起こる。そういう学校は、私はつぶれてほしいと思っているんです。そこまで私は強烈に思います。やっぱり教育はどうあったらいいの？ということをもう一度考えるための、すごく意味のあるお話が今日のお話になっているんじゃないかなと思っています。

（坂田教育長）

ありがとうございます。いえいえ、教育をもう一度考え直してみる、これはすごく大事な話だと思います。これは行政も同じだと思うんですけれども、われわれはどうしてもデータの上書きをやってしまいます。なぜこれをやるのかというところの WHY の思考というのがだんだん失われていくんです。学校は今まさにそれではないかと私は思っています。なぜ子どもたちを指名するのか、なぜ通知表があるのか、なぜ授業をやるのか、なぜ算数という教科を学ぶのか、ここを考えなければいけない。それを考える一つのきっかけになるのではないかというようなご発言でした。

さて川勝校長、兵頭委員から実は子どもたちの成長に大きく役立つんだと、もしくは教員の意識も変わってくるんじゃないかというようなお話があって、柿添代表からはコミュニティハウスを使うことによって何かが生まれてくる場所なんだというような話でした。学校現場の活用方法と実績をちょっと教えてください。

（川勝校長）

はい。パワーポイントのデータはございますか。

（坂田教育長）

データが用意できるまで、議論を進めます。

（川勝校長）

はい。

（坂田教育長）

じゃあ最初に土屋委員から、また感想で結構です。もちろん、もしくはご意見でも。

（土屋委員）

はい。教育長の今のプレゼンというか話の中で、私が感じ入っているのは、教科書ではない大人との出会いの場という感じで。これは、私は支援者を養成する仕事をしていますけれども、同時にいろんな民間の方々、NPO の皆さんとかとも仕事をしていまして。

乳幼児から学齢児の訪問支援をやっているところとか、あとは学習支援とか居場所支援、居場所をつくったりしているようなところと組んでいたりとか。それから昨日も実は私がヤングケアラーの支援をやっている方と今教材づくりをしているのですけれども、学習支援、居場所支援のところとアドバイザー等になっているんですけれども。皆さん口々に「子どもは評価をされない場で、何でもしゃべられる場というのをすごく欲している」というふうに言っていて。それは本来はおうちでやることなんだけれども、それの機能がやっぱり低下しているので、その中間地点がすごく必要だということを皆さんおっしゃるんです。

支援者、ソーシャルワーカーとか福祉ソーシャルワーカーとも話していても、やはりすごくそれを感じると言っていて。コミュニティスクールはスクールなので学校寄りだと思うんですけれども、こちらはコミュニティハウスですよね。学校の中にあるんだけれども家との中間地点、学校と家との中間地点の場をすごくつくっているんじゃないかと私は思っていまして。だからそれが多分先ほどの、評価者じゃないという人が集う、先ほど柿添さんもおっしゃっていたような何かが生まれる場所という何かというのがすごく大切で、それが決められたものじゃなくて何でもいいと思うんです。創造性だと思うんです。そういうのが必要だなということと。

あと私は教育福祉が専門なんですけれども、福祉の観点から言うと、多様性とかバリアフリーとかいうのは、もう今すごく重要だということになっていて、やっぱり居場所づくりというのはすごく盛んになっています。それはやっぱり同じような感覚で、ごちゃ混ぜの家とか垣根のない家というところ、人が集える場所というのを、もう福祉の分野でも地域を結びながらいろいろとつくっている方たちがいらっしゃるんで。

だから観点としては、ものすごく精神的なことを都内では清瀬が随時やっているということがものすごい価値だなと思っていまして。そこを本当に子どもたちが何でもしゃべれて、そこで安らげて。ちょっと安らげないと創造性というのは発揮されないと、クリエーションは出てこないと思うので、その視点はすごく大切なんだろうなと思いました。

今、国で話が進んでいる例えばヤングケアラーもそうですし、あと孤独・孤立の解消のための国でこういう分科会を持って内閣府でやっている中でも、学校プラットフォームという言葉が出てきています。これは子どもの貧困のことが言われたときも学校プラットフォームと言われたんですけれども、またここで出てきているんです。今

コロナを経て、ウィズコロナの中で出てきていることで、学校じゃないと出会えないというふうにもう世の中がなってしまっているという、人々が出会う場は学校であるとなっちゃっているので。だから、まさにこのコンセプトがそれに合致するなというのをすごく感じているところで、非常にこの事業に私はすごく結構、かなり注目しています。

多機能、先ほど宮川先生がおっしゃったように、多機能というのは、これは福祉の世界でもまちづくりの世界でも、すごくキーワードになっています。小規模多機能自治体ということで、多機能をみんなでいろんな人たちがそれを担っていくという考え方になっていますので、共生社会ですね。だからそういうのを考えても、このコミュニティハウスというのが東京の中でほんとここでしかやっていないので、すごく着目しています。

（坂田教育長）

ありがとうございました。実はこの本の中にも全く同じことが書いてあるんです。

（土屋委員）

そうでしたか。

（坂田教育長）

こういう文章なんです。紹介します。その中学校にやんちゃな子がいたと。やんちゃで手に負えない男の子がいたんですが、卒業直後の５月にコミュニティハウスにふらりとやって来た。その子は「駅に降りたら自然と足が向いちゃったんだ、元気がないんだよな」と言って私の目の前でうなだれ、「この学校は僕がいなくなって平和になったでしょう」なんて元気なくつぶやくんです。私は目の前でその子の頭を何度もなでたことを思い出します。そして、しばらくして落ち着いたところで「先生に会いに行ってごらんなさい」と言うと、「先生いるかな」と言いながら職員室へ向かったんです。多分直接は足を運べなかったんだと思います。コミュニティハウスがあったから戻ってくることができた。もう１人の方がこう言っています。

それはコミュニティハウスが評価から離れた場だからだと思います。子どもたちに「学校の中で一番好きな場所は？」と聞くと、保健室だったり相談室だったりする。つまり、評価から離れてフリーになれる場所、その上いつもオープンで誰かがいる温かい場所、そういう場があるのはとても重要です。こう書いてあります。まさに今、土屋委員がおっしゃったことが実践場面でも、これは価値として共有されているということです。また、そこら辺も後で学校の話を聞きたい。粕谷委員、お話を。

（粕谷委員）
　はい。まず清瀬で初めてのコミュニティハウスというものができたんですけれども、これはまだ１つですが、今後絶対に２つ、3 つというふうに広がっていくでしょうし、広がっていくべきものだと思います。
　そういった中で、後ほどご説明いただけるということなんですけれども、まだ十分に活用し切れていない。それはまだ未知数の部分が多いと思いますので、だとすればそれは非常にもったいないことであって、新校が開校するまでの間にどれだけ、言い方はあれですけれども、使い倒すというのかな、試行錯誤、失敗もあると思うんです。やらないで「なんだ、終わっちゃったね」というとすごくもったいないと思うんです。取りあえずやってみませんかということで、そこからじゃあ２個目のコミュニティハウスであったり３個目のコミュニティハウスというものにつなげていく、非常に今大事な期間であると思います。
　もう一つ、このコミュニティハウスというのはいいよねと思ったところが、地域ごとに小さい感じで行われていることはすごくあると思うんですが、それは活動内容もかなり制約がありますし、そこで終わってしまっている場合が多いと思うんです。でも、じゃあそれを集約するような場所があれば。例えば柿添代表が竹丘にお住まいで、コミュニティハウスは中里にあって。

（粕谷委員）
　旭が丘にある学校のイルミネーションですよね、この前やられていたのは。

（粕谷委員）
　ある意味清瀬の端（はじ）から端までつなぐ、今回はコミュニティハウスがハブになったわけですよね。だからもしかしたら、じゃあもっと竹丘地域にあって旭が丘地域にないような活動だったりコミュニティというのが、そのまま人同士のつながりだけでそこまで行くのはすごく時間がかかるしエネルギーも要ると思うんです。だからそれを取りまとめるような場所であったり、広めたいけれどもどうしたらいいんだろう。じゃあ、まずあそこに相談してみようよというものが、今は１つですけれどもそれがもう少し増えて、またそこにネットワークができれば、ある地域の資源を清瀬全域で活用していける可能性というのが非常にあるのかなとプレゼンを聞いて思いました。以上です。

（坂田教育長）

ありがとうございました。公共施設の再編のコンセプトと一緒であるということを何度もお話し申し上げましたけれども、恐らく今後はああいう単独の独立した形ではなくて、東山田方式ということもきっと考えられていくのではないかなというふうには思います。学校の施設の中にコミュニティというものを、出会いの場を設けていくというような考え方、それがやはり今清瀬では求められている、今まさに議論をしていることではないかと思います。では貴重なご意見をありがとうございました。まだ柿添代表からは実際の具体もお聞きしたいんですけれども、まずは川勝校長からお願いします。

（パワーポイント資料を上映）

（川勝校長）

分かりました。まず清明小とこの清瀬市のコミュニティハウスとの出合いは、10 月にコミュニティハウスの運営をされている柿添代表からヤギを貸していただけるという話を頂いたからです。10 月から 1 月までの 4 カ月なんですが、清瀬市コミュニティハウスと連携した学校づくりの取り組みを 4 つお話しします。

1 つ目はコロナ禍の活動制限のある中、校外学習が実施できなかったので、低学年で生き物と触れ合う活動ができませんでした。そのときにヤギの話を頂いたので、ぜひということでケージからお世話の仕方から土日のお世話も協力いただけるという話でしたのを頂いています。

学校だけでヤギを飼うことは、さまざまな面で課題があります。でも連携できたことで学校の負担が少なく、そしてお世話をしてくださる地域の方と子どもたちが触れ合うこと、そして柿添代表のほうから「ヤギのおじさん」と言って、子どもたちと触れ合うこともできました。そしてヤギとの触れ合い学習を実施することができ、その後低学年のヤギの触れ合いがさまざまな学年に広がりました。

3 年の図工でもヤギの写生をしたり、学級活動の時間を活用していろいろな学年がヤギを散歩させたり触れ合う体験をしました。意外な効果があったものとして、ヤギと触れ合いたくて不登校傾向の児童 3 名が学校に登校できる日が増えてきました。そこで 12 月に返すことになったときに、その不登校の子がまた学校に来られなくなっちゃうんだけれどもなというお話をしたら、3 月まで貸していただけることになりました。3 月まで置いていただくことになりました。

2 つ目は学習活動の地域人材や協力企業・団体を紹介していただき、学習活動が充実した事例です。4 年生の総合的な学習の時間に環境について学びます。

11 月に行った柳瀬川体験学習の様子です。柳瀬川が昭和 60 年ごろ泡だらけの川だったこと、現在のようにいろいろな生き物が住める川になるまでの再生のための人々の努力や工夫について学ぶのですが、今では安全面、それから用具の準備等で、学区

を流れる川でありながら写真やインターネットでの調べ学習しかできませんでした。
　コミュニティハウスを通じて、川まつりでも協力いただいているグローブライド株式会社と学校をつないでいただき、コミュニティハウス・グローブライド株式会社・市環境課と連携した学習をすることができました。
　安全面での人材確保、救命胴衣、ウェーダーなどの用具、それから濡れた児童用の着替え用テントなどの準備をしていただき、講師も全て手配していただいたことで学習を充実させることができました。
　これは川での観察の様子です。学区の身近な川でありながら4年生でも川に入るのが初めて、魚に触るのが初めてという児童が3分の2もいました。今回初めての体験学習ということで時間が短く、子どもたちで実施する時間がなかったため、捕まえた生き物をコミュニティハウスやグローブライドさんの方々で写真に撮り、数を数えてくださいました。
　それを基に生き物から見られる柳瀬川の環境について、中本賢さんを講師に事後学習も実施しました。実際に体験したことで柳瀬川がきれいな川になったことを学ぶことができ、さらには 50 年後の柳瀬川をどのようにしていきたいかということについても考えることができました。この学習も学校だけでは決してできず、実現しない学習でした。次お願いします。
　3つ目は6年生の総合的な学習の時間で、新潟県佐渡島のトキ保護団体の方とつないでいただきました。
　6年生はキャリア教育の一環として保全活動をしている方に話を伺えたことで、NPO法人の活動に関心を持った児童がいました。また4年生で下宿ビオトープ公園の観察学習も実施しているため、同じく保全活動をしているということについても関心を持ちました。
　最後に清明小の地域は都指定無形民俗文化財の「ふせぎ」行事があります。まちたんけんで2年生が清瀬市の学習を、3年生が「ふせぎ」について学びます。「ふせぎ」の大蛇を作るための基本は縄をなうことです。稲わらを購入しようとしましたが、高くて買うことができませんでした。清瀬市コミュニティハウス柿添代表に相談し、稲わらを分けていただくことができました。そして体験学習が実現できました。実際に体験することで4本でなうのも大変なのに、大蛇を作るのにはどれだけ大変なのかということも実感することができました。この後6年生は2人で太い縄をなう体験をする予定です。
　今年度 11 月から清瀬市コミュニティハウスと連携した学校づくりをしてきましたが、この約3カ月だけの間でも充実した地域との連携した学校づくりを行うことができました。
　これはおまけの活動の様子です。主催は保護者の会です。コロナ禍、集合しての子ども会活動ができなかったため、子どもたちのためにコミュニティハウスと連携して児童も制作に加わりながらイルミネーションを実施しました。学童クラブの児童が帰宅する時間、正門の辺りはとても暗いです。イルミネーションのおかげで明るくなっ

たことと、地域の方もイルミネーションを見に来校され、防犯の一環でもつながりました。

これらの活動、今まで挙げた４つの活動は次年度も継続して実施し、学びの充実を図っていく予定です。そしてこれらの活動は清明小だけでなく、校長会などにも報告したり口利きで今広がっていて、連携した活動が市内でも行われています。そして幼保小中学校に今広がっているヤギの貸し出しも幼稚園とかにいっています。

コミュニティハウスの連携でこれは私がうれしかったことなんですが、地域の学習素材を出して教育活動を充実させたことで、全国学力調査の意識調査結果では「地域や社会を良くするために何をすべきか考えることがありますか」というところで、「当てはまる」、「どちらかといえばよく当てはまる」と答えた児童が増えたこと、それと東京都の平均より高かったということが、この連携の成果の一つと言えます。

コミュニティハウスと連携でできたこと。教育活動の広がり、さらに地域の学習素材の活用や地域人材の活用による教育活動の充実、清瀬市から新潟などと全国、さらには今後外国ともつながった教育活動を行うことができるというふうに思っております。

これは第２次清瀬市総合教育計画マスタープランです。地域の学習素材を学ぶことで、児童の学びへの関心が深まります。学校においてこのマスタープランを実現していくためには、やはり地域のいろんな人とのつながりができることで、子どものこの学校だけではできない体験ができる、そして保護者も学校に目を向けるようになってきました。次年度は柳瀬川の体験でもグローブライドさんや、きよせラボの方だけで今回の人材確保をしたんですが、保護者にも飛び込んで教育活動をしていきたいと思っています。そのことがやはり保護者の家庭への教育力の向上につながると私は考えております。以上、学校での４つの事例でした。ご清聴ありがとうございました。

（坂田教育長）

ありがとうございました。この川勝校長も感動されたこのデータ、私もちょっと感動ですね。まさに地域を支える人材が、ここできよせラボとの連携をすることによって増えているということですね。エビデンスとしてこうやって現れてくるということは、理念で語っているよりもずっと何倍もこれは説得力があるます。兵頭委員、一言だけ。

（兵頭委員）

もう素晴らしい実践だなと思って聞かせていただきました。地域を題材にして取り組むにしても、やっぱり学校の先生たちはそういう思いがあっても、時間もなければ、いろんな道具を集めたりとか予算的な問題とか、いろんなことでうまくいかないというのはたくさんあると思うんです。それを、きよせラボと連携することでそういう心

配がなくといいますか、本当に充実する活動が行われたというのが今の事例もどれも素晴らしかったなと感じます。

清瀬の財産である自然環境だとかそういうものも、柳瀬川の学習にしても、お互い隣接の学校はいっぱいあるわけで、本当にそういう機会があればありがたいなというふうに思います。保護者の家庭への教育力を高めていくというのは、やっぱりいつの場でも話題になって、なかなか家庭へそういうことを求めるのが難しくて、何が突破口になるのかというような話がよく出ますけれども。やっぱり保護者が学校に関心をより高く持つということが、今の校長先生のお話の中にもあったのかなと思うんです。

子どもの環境が良くなれば、また子どもたちが地域の人たちの支えによって、より充実した学習をするようになれば、保護者の関心自体が全く違ってくるなと。そういう方々がまた自分の子どもが卒業した後にでも、その学校に関わっていきたいとか地域を支えたいというような、芽を作ることができるんじゃないかなということを今発表を伺いながら感じました。本当にとても分かりやすい発表でありがたいと思います。

（坂田教育長）

ぜひこれは校長会で広めていって、あと地域の学校支援本部の会でもやっていきたいんでお願いします。私は川勝校長のお話を聞いていて一番思い浮かんだのは何かというと、教育というのは経費ではないということです。投資なんです。教育というのは投資なんです。だから未来への投資なんですね。未来を支えるのは今の子どもたちですから、その子どもたちにどれだけ、どういう投資を行っていくのか、それが一番効果的なのかと。

私は趣意書にも書きましたけれども、実はあちらにもこちらにも投資をするというのは、財政効率からいくと一番良くない。これを打てばこれにも影響する、これにもこちらにも影響するという、いわゆる選択と集中と関連付けの考え方で投資をやらなければ絶対に財政破綻するんです。

この地域との協働、もっと言ってしまえばコミュニティハウスの存在というものが選択と集中と関連付けの結果であって、さまざまな教育課題を解決していく有効なツールになっているんではないか。またまちの課題を解決していくツールにもなっているんではないかと私は強く思うんです。

今、川勝校長のお話は、いわゆるフィールドを学校とか川とかというところで連携協働のフィールドをやりましたね。コミュニティハウス内でも連携協働の場として機能していると思うんだけれども、そこら辺の説明、何かDVDとかあれば。

（柿添代表）

今回その説明動画を準備してきましたので、せっかくですのでそちらを流していきます。

（坂田教育長）
　上映の環境を整備している間、議論を進めます。これから先、じゃあこのコミュニティハウスはどういうふうに機能していくべきなのか。いろいろな可能性を今事例も理念も出していただきましたけれども、今後どういうふうに展開していくべきなのかというところは、これは八小・清小の新校をうまく機能させていく上でも、ここでちゃんと議論する必要があると思います。そこはどうでしょうか。粕谷委員、今後コミュニティハウス、地域との協働としての場。
　先ほどいろんなとこにその場があったほうがいいじゃないかという話があったんですが、例えば場は本市にはあるんですよね。貸会議室みたいなのであれば下宿の体育館もあるし、使おうと思えば学校の体育館だって使えるし、何でコミュニティハウスでないといかんのかというところがきっとあるんじゃないかと。そこら辺は何かお考えあれば。

（粕谷委員）
　スペースは、活用していないスペースは確かにたくさんあると思うんです。ただコミュニティハウスというのは何なのだろうと考えれば、別にスペースだったり箱という意味ではなくて、それをどううまく使いこなすかという、かじ取りみたいなものがあってこそのコミュニティハウスなんじゃないかと思うんです。
　ハウスが問題なんじゃなくて、その中身一帯を使って初めてコミュニティハウスは機能するんじゃないかと思うので。じゃあ例えば体育館があるから、すぐに使えるのかというとそうでもないと思うし。コミュニティハウスというところで箱もそうですし、中の人材もそうですし、そこがどううまく回るのか、どううまく回していくのかというところをしっかり確立できないと、じゃあ次の場所にという。

（坂田教育長）
　場をつくっても駄目だと。

（粕谷委員）
　はい。

（坂田教育長）
　まさに今またこれに書いてあるんですけれども。おっしゃるようにぷらっと立ち寄

れる、もっと気楽に立ち寄るというような場でなければならない。いわゆる学校の体育館はそんなにぷらっと立ち寄れないんですよね。あそこを使うのは手続きが必要ですから。学校の教室なんてなおさらです。じゃあ、貸会議室はどうなんだ、コミュニティプラザひまわりは、ぷらっと立ち寄れるのかといったら、やっぱりあそこだって金がかかるわけです。ぷらっと立ち寄って何か話ができる場、もしくは交流ができる場、ちゃんとその代わり組織として活用する場合はお金を取って活用しますよというような場、私はその二面性がコミュニティハウスには必要で、そういう機能はあんまり今現存していないんじゃないかと思うんです。ぷらっと立ち寄れる場か、でなければ金を取ってばしっとやる場か、その両面を持つというのは、私はコミュニティハウスの価値じゃないかと思うんですけれども、土屋委員はどう思われますか。

（土屋委員）

まちづくりの中で家開きという考え方があって。個人のおうちを開いて。この近隣だと小金井市で結構やっている人が多いんですけれども、自分のうちをちょっと１部屋開けておいて散歩の帰りに寄ってもらって、庭を眺めていてお茶を飲むみたいなことをやって、少しお茶を出してお金をもらったりもしているらしい、家開きという考え方があったりとか。

あとカナダだとソーシャルワークも盛んなんですけれども。カナダでは子育て支援の中に、おうちをやっぱりドロップインというふうにして、誰でも来られる場所にしているんです。そういう機能が多分コミュニティハウスにはあるんですが、それがあるといいなというハウス機能、それが一つ。

あとはアーカイブの機能。今先ほどの川勝校長がやられているようなそういうものをちゃんとアーカイブする場は必要なんです。ということと、それが１つのモデリング、１つのすごい機能なので、これをモデル事業、モデリング。アーカイブ・モデリング・ハウス機能、そして今実際にやられていることは、私たちのソーシャルワークの考え方で言うとアウトリーチなんです。出向いていってやっている。ソーシャルワークの考え方で思うと、少なくともすごくやっている。だからドロップインとか家開きみたいな感覚で人がふらっと立ち寄れて、それが１つの機能です。それで、モデリングとアーカイブができたらすごいことになるなと。そしてアウトリーチはもう既にやられているので、というのを思いました。

（坂田教育長）

いわゆる何ていうの、ハウス？

（土屋委員）

そうですね。今やろうとしているのは、おうちのような、家のようなコミュニティのような、ちょうど中間地点みたいなことなんです。

（坂田教育長）
いわゆる第三の居場所みたいな。

（土屋委員）
そうです。第三の、サードプレイスと考えてもいいと思います。

（坂田教育長）
なるほど。それとモデリング。1つのモデル。

（土屋委員）
そうです。1つのモデルで。市の行政の価値にものすごくなっている、なるはずだなと思います。

（坂田教育長）
なるほど。アーカイブ機能というのは、いわゆる実践を積み重ねていって。

（土屋委員）
実践を積み重ねて、そこにそうです、川勝校長がやったようなことを、例えば校長がもし異動されたとしても、また引き継いでいけるということです。

（坂田教育長）
なるほど。共有化という意味ですね。

（土屋委員）
そう、共有化という意味です。

（坂田教育長）
　４つ今非常に貴重なご提案を頂いたということで。 ちょうどいいかなと思います。場としてどう活用するか、アウトリーチももちろんやられていらっしゃいますから、場としての活用も柿添代表から聞きたいと思います。どうぞ。

（柿添代表）
　簡単にですが３分ぐらいでまとめましたので、まず動画を。

（動画資料上映）

（柿添代表）
　清明小の前でもお母さまたち、今ミュージカルの準備もしています。また終わりましたらお話します。学校では学ばない項目とかがあります。

（動画資料上映終了）

（柿添代表）
　ありがとうございます。ちょうど３分で、作ってもらいました。といっても外注とかではなくて、ちょうどこの同じメンバーで、これ自体、作ること自体も考える活動目的にして。今はコミュニティハウス内部もありましたけれども、ちょうど先ほど言われていた最初、冒頭にあった取りあえずというの、取りあえずやってみようというところを強く。今までのコミュニティハウスの活動において私たちがまずやっていこうと思ったのは、もう私たちきよせラボの概念としては、もうトライアル＆エラーでまずやろうと。そういう中長期的なものに関しては学校や、そこのところから計画立ててやるところは、まずやっていただいたらいいなと思っているところがありまして、まず私たちで今目の前にある課題を解決していこうと。
　そもそも子どもたちに、主体的に問題解決にと教えているときに、私たち大人が目の前のことを解決しなくてどうするのと。だからまず私たちから実践的に解決していって、いろんな中でそれがもしかしたら身近過ぎる話題、でも意外とそれは昔から全然解決していないというところを一つずつ、なるべく即実行というところで取り組んでいます。
　川勝校長先生からお話を頂いたところの、このわらについて。実は、ただわらを無償で刈ってきたわけじゃないんです。先ほどの柳瀬川に入ったのも、私たちが何かし

てほしいから持っていったわけでもない。そこをやりたいというのが目的ではなくて、元々学校の先生がちょうどヤギの話をしていたきっかけのときに、ちょうど先生がいらっしゃって「柳瀬川で体験学習をやりたいんです」と主張されたんです。だから今さっき、先ほど言っていた先生自体も清瀬に通う一勤め人ならば、やっぱその先生がこうしたいと思う一番やりたい授業を子どもたちにやってもらえれば、多分子どもたちは絶対喜ぶだろうと私は思った。

それが内容はいかんにしても、それをやりたいと言ってきたところが常に集うところにあって、ヤギを。まずヤギというのは目的ではそのヤギを、私の中ではヤギを連れていって何かしてあげたいとかではなくて、学校にとってもヤギを連れていくのがハードルが高いこともあり得るから、例えば除草目的で授業とは関係なくてもいいからヤギを連れていっていいですかと。いきなり授業終わって「使ってください」と言うと先生方もぐっとハードルが上がって安全面からこうから、こうからと。であれば、まず、除草の話もそもそも自治会において過去 3 年、4 年前ぐらいに外注していて 30 万、40 万とかいっぱいかかっていると。そういうところからヒントがあった流れで、ヤギの話が今回そもそもあって。コロナで学校外には学びに行けないというところで、いろいろな複合的な要素があってのヤギであって、連れていったことが結果的には子どもたちの学びにもつながりましたけれども、そこにはそうやっていろんなつながりがあって、それがあることで当然ある意味私がやることというのはどちらかというと、例えはあれですが野球とかサッカーみたいに裾野が大きいものはもう既に組織があるので、私たちがあまり手を加えなくても力を入れなくてもできるだろうと。

よく身近にあるのは野球、サッカーでよく集まる組織はあるので、そういうとこではなくて、それはそれで今までどおり連携していただいて、まだまだ光り輝きそうな人たちを集約してそうすることで知の図書館というか、そういうところでつながっていくと。

わらについてもヤギを借りたところが長野県伊那市。これを私は後から知りましたけれども、総合学習で有名な小学校が伊那小学校だと後で知りました。結果的に、実はここは何の紹介もなしに、何も知らずにアポを取っていて、「どうぞ」と言われて見学に行ってきて、それはヤギが終わった後なんですけれども。でもそこで行ったときにちょうどパカパカ牧場、その当時の有名な先生がいらっしゃるんです。その方が、1 年前の話なんですけれども、来年もやるんだったら稲刈りもおいでと、稲わらだったらあげるからということで、ちょうどヤギを借りたときに、次に脱穀作業を 10 月にやるからといって稲刈りの手伝いを私が行って。そのときに何かあったらその人自体に清瀬にいつか来てくださいということも目的で。そしたらついでで「稲わらも持って帰っていいよ」と言われて、軽トラいっぱいに詰め込んで帰って来たんです。

そもそもがヤギで寝床を作ろうと思って持ってきた。そしたら意外と子どもたちがしっかりと清掃をし始めたので。清掃というか取り組み始めたので、全然寝床が汚れなくなったんです。そしたら稲わらが余ったと。そしたらどこかしらで、実はそのときのコーディネーターのヤマムラさんとかがいて「ふせぎがありますよ」と、先生か

らも「ふせぎ」と。私はでも実は申し訳ないんですがあまり知らなくて。そしたら稲わらを使うと。「ああ、余っていますよ」と。というところが実はもう一つうまく向こうの地方にとって長野の遠いところでは不必要というか十分あったものが、こちらにとっては有用で、なおかつお金がかかっている。その段階で既に同じ内容をやっていなくても過去にやっていたことに対してお金はかかっていなくて別のことに使えるか、もしくは圧縮できる課題ということが全部つながりだけであったもの、今あるものでどうにかしようというのがここのヤギからの関連で、実は全部がつながっている。

清瀬市においての実は他の部署の環境課というのが今さっき出てきましたが、川まつりとかで参画していたグローブライドさんが学校のために何かしたいという話を聞いていました。そこを情報処理できていたので、ちょうど清明小学校からこういう話が来たので、ああ、ここも結構マッチングできるじゃないかと。

もう一つ、私たち自身がそこにあまり集約し過ぎると他の活動が止まってしまうので、そこをいわゆる自立できる、ある意味企業参画というのは、私たちが年を取ってできなくなる可能性はずっと繰り返しやってきて、盛り上がるときは2〜3年ぐらい。でもやっぱり年を取っていって子どもが卒業すると、どうしても衰退するというところにいけば、やっぱ継続的に持続的に地域に協力的な企業さんに参画してもらうことで事業においても、もしかしたら物品の供与についてもできる可能性があるというところがあったので。

といったところも、既にこの話は実践されましたけれども、柳瀬川も私たちが通った回数は少ないです。その段階において、ある意味別の小学校に、私はコミュニティハウスの機能を他のところにリソースを割くことができて、というところの究極はそれを目的に。言葉はちょっとあれなんですが、私の行きつくところはコミュニティハウスの機能がなくなるために活動していくこと。が結果なくなったときには、地域が出来上がっていますよねというところで発表を終わります。

（坂田教育長）

ありがとうございました。ハブ、まさにハブですね。ハブになっているという。学校と地域だけじゃなくて地域同士を結ぶとか、企業とNPO法人を結ぶとか、企業と学校を結ぶとか、個人と学校を結ぶとか、いろんな形のハブとしての機能。いわゆるそういう力を集約化していくと、限られた資源をフル活用していくことができるわけです。やはり本市のように7万5,000自治体で300億程度の歳出・歳入の自治体というのは、やっぱりこの資源の有効活用というのがどうしても必要になってくるわけです。その1つの切り口になっていくかなというふうに、まちづくりができなければ、何の切り口になっていくかなと思います。今度どうことを期待したいか、兵頭委員。

（兵頭委員）

はい。今、柿添代表からもお話ありましたけれども、本当につなぐという役割は、このコミュニティハウスでは今すごく出ているなというふうに思うんです。それぞれの学校ごとの支援本部も当然自分たちの資源というのは持っているけれども、やはりそこはまだ範囲が狭かったり、かなり個別化しているものだと思うんです。それをいろんな学校に展開していくには、やはり情報を共有したり、そこから口を広げていったりという意味ではコミュニティハウスの役割は、支援本部のそれぞれの活動をもう一回大きく展開するためにすごく必要な場所になっているなというのを、お話を聞きながら思っています。そういう役割が今後もあったらいいなと思います。

（坂田教育長）
なるほど。繰り返しになりますけれども、支援本部というのは、いわゆるヒューマンネットワークで出来上がっている組織ですから。そこに、ある意味では場とそれから組織力、ちゃんとしたガバナンスが利いた組織力を持ったところが協働することによって、より一層機能が高まっていくと、そういうところを期待したいということですね。粕谷委員。

（粕谷委員）
はい。今トライ＆エラーということを大事にされているということで、そのとおりだと思います。ただ、先ほど中長期的に考えたときにというところで、それはこれからというお話だったんですけれども、コミュニティハウスというものが今後も続いていく、そして増えていくとすれば、トライ＆エラーの次に今度じゃあ依頼があってというところではなくて、今度は自発的に投げ掛けていくという要素も必要で。今はそれは必要ないのかもしれませんけれども、その比重というのが恐らく今後どんどん逆転していく。受けるという部分がなくなるということではないと思います。ただそれがフィフティ・フィフティなのかもしれませんし、自主性、自立性みたいなものが必然的に出てくると思いますし、必要になってくると思います。その辺のビジョンは恐らく柿添代表にはおありなんだとは思いますけれども、またの機会にそこの辺もお伺いできればというふうに思います。

（坂田教育長）
川勝校長、学校の立場からハウスに希望すること、期待することを。

（川勝校長）
はい。学校だけでは本当に何もできないというか充実ができないので、やはりもう

お金の面もそうですし。なので、もうつないでもらう、とにかくいろんなところとつないでいただいて、子どもの教育活動が充実すること。さらには地域支援本部もあるんですけれども、支援本部はまだ積極的になれないんです。なので、そこも刺激してもらいつつ、地域支援本部も引き上げていってほしいと思っています。

（坂田教育長）
　なるほど。宮川職務代理者、議論をずっと聞いていていただいて、今日ご発言を私がマネジメントする機会が少なかったですけれども、最後にご発言いただけますか。

（宮川職務代理者）
　今日参加させていただいて、本当に勉強になったなと思いました。川勝校長の実践、やはりこれが川勝校長もずっと長い間やっていただくわけにいかないだろうと思います。失礼な言い方ですけれども。何を言いたいかお分かりだと思うんですけれども、校長先生方がそれぞれ築いてきた新しいやり方とか正解というものがなかなか継続しない。兵頭委員などはそれですごくじれったい思いをされているんだと思うんです。柿添代表のお話を聞いて私は納得しました。
　なぜかというと、今東京都で初めてなのかどうか知らないけれども、独立した建物としてのこのコミュニティハウスが取りあえず今は独立してありますけれども、でもこれからは学校の中にあって、そしてそれがやがて消えていくときがあるんだと。そのときに、その学校を中心とした地域に新しいコミュニティができるんだと、それはすごく納得しました。そうでなくちゃならないと思っています。
　今、清瀬市の小中学校の再編整備あるいは公共施設の老朽化等に伴う多大な財政的な投資をしなくちゃなんない。こういうことに併せて、そのための事業をどうしていくかじゃなくて、次の時代の AI 時代の、いわゆるシンギュラリティなんて言われているコンピューターがコンピューターで自分でプログラムを作っていくような時代に、それをちゃんとコントロールできる社会や人間を育てていくというのは、やっぱり人間同士の話し合いの中で私たちの世界をどうしていくのかということを議論できる世界、それが柿添代表のコミュニティなんじゃないでしょうか。
　だからそういうものをつくっていくためのものを学校の中につくっていくんだと。だから八小と清小の再編整備の中で、新しい学校づくりをするわけですね。その新しい学校のコンセプトとして、このことをしっかり位置付けていくということかなと、私は考えさせていただきながらおりました。そうすると、土屋委員からいろいろお話あったようなサードプレイスとしての在り方とかソーシャルワーク機能を持った新しい学校機能とか、そういうものがつくられるのかなと思いました。
　つまりそれは子どもたちの、いわゆる今まで言われていたキャリア教育というものが、ほんとの子どもたち自身が自分自身に自信を持ち、自分たちの未来に希望を持て

るような、そういうキャリア教育をする環境がこのコミュニティハウスで今、柿添代表を中心にして実践されていることなどが 1 つの成果として学校の中で具体的に展開できる新しいコミュニティスクールをつくっていくということに、私はつながっていくのかなと思います。

今までコミュニティデザインとか、そういうことも一緒に勉強してきました。島根県の海士（あま）町の人口 30 年後にはゼロとなると言われていたまちが、今すごく盛り返していますよね。それは今のところはどちらかというと、人と人とのつながりをつくる場にしかなっていない。けれども、今提案されようとしているところは、清瀬の中のコミュニティハウスというのは、新しい人と人とのつながりだけじゃなくて、新しい教育の内容や仕組みとか、そしてそれはそれぞれの専門家によってつくられるんじゃなくて、地域の人たちによってつくられ、地域の人たちが学ぶ環境をつくっていくことによって、それが基礎的自治体として存続できる、そういうことにつながっていくのだと。

だから学校というのは、そういうものにしていかなくちゃなんない。そういう発想でもって清瀬市として新しい学校づくりとか、そしてやはり柿添さんのような方が、最初はいろいろと苦労や投資もあると思うんですけれども、だんだんと自立経営できるような、それが今まで行政が一翼を担ってきたことが全てだったみたいな世界から、行政はもっと企画とか方針とかそういうところを明確にしていく中で、まちの人たち地域の人たちがそれぞれに責任を持って、このまちをつくっていくというような、そういう状況にしていくこと、その発端になっていただけるのが一番かなと思いました。ちょっと抽象的かもしれませんが、以上です。

（坂田教育長）

ありがとうございました。すいません副市長、ずっとお話を聞いてきていただきました。途中で副市長のご感想も聞かなければならないと思いつつも、こちらのほうで盛り上がってしまったものですから、私のマネジメントミスで申し訳ございません。われわれの議論を聞いていただいた感想を述べていただけると。

（瀬谷副市長）

はい。まずは、今日は本当にありがとうございました。このような場に一緒に集わせていただけたというようなことは本当に感謝いたします。また日頃さまざまなことで実践をしていただいているということを、本当にありがとうございます。

まず子どもを育てるのは投資をすること、そのためには学校だけでは当然できないことがたくさんあります。そこにずっと最初から最後まで議論があったように、地域の人たちをどのように巻き込んで、そして地域全体でどうやって育てていくかと。それがゆくゆくは清瀬を背負っていくような子どもたちを育てることになるんだよというようなことを、最初から最後までおっしゃっていたのかなというふうに思っています。

最初に教育長のプレゼンの中で紹介があったように、知らない人に付いていかないようにあいさつはさせないようにしますというような社会をつくるのではなくて、やっぱり誰とでも気軽にあいさつができて、みんなが大人でも子どもでも、それから高齢者の方でも、みんなが子どもたちのことを思いながら暮らせるようなまちにしていければなというふうに思っておりますので、またこれから先も私たちのほうでできることは一生懸命やらせていただきますし、また学校とも教育委員会ともしっかりと連携を取りながら進めさせていただきたいというふうに思っております。今日は本当にありがとうございました。

（坂田教育長）

ありがとうございました。それでは最後、今日の議論を私のほうでまとめさせていただきます。議論のテーマは私が２つ設定しましたが、途中からそれが多分混在して語られるようになってしまったんで、私もざっくりと結論を述べさせていただきます。

今後、やはり今われわれが取り組んでいる地域との協働については、どうしてもこれは不確実なものであるということで、市長部局とわれわれが力を合わせながらこれは取り組んでいかなければならない課題であろうということは、皆さんの発言から導き出せると私は思います。

もう一点は、やはりこれから先コミュニティハウスをどうしていくのかというような議論だったと思いますが、これはわれわれ行政判断もありますので、われわれの中でもしっかり議論をさせていただきたいというふうに思うんですけれども。とにかく今、副市長が最後にお話しいただだいた誰とでもあいさつが交わせるようなまちをつくっていく、それの１つのプラットフォームにもなり得るものではないかというところが、私は非常に大きな価値。あとは未来を担う子どもたちを育てていくもう一つの教育機関、教育の場であるということ、そこも非常に重要なことではないかなと思いました。

もう一点、次のステージに何を期待するかというところでは、アーカイブ機能、モデリング機能、ハウス機能、アウトリーチ機能、土屋委員からこの４つを示していただきました。また粕谷委員からは自主性、自立性というお話を頂きました。私も一つぜひご提案申し上げたいと思います。トライアル＆エラー、取りあえずやってみようで結構ですから、ぜひ市内のさまざまな地域支援、学校支援、子ども支援団体をつないでいただきたい。今、実は青少協がある、それから健全育成がある、それから保護司会がある、たくさんの機能があるんですけれども、それがみんな独立して動いているんです。それがひとまとめになると、先ほどの話で選択と集中と関連付けがなされれば、より一層機能が高まるだろうと。私はそのハブとしての機能をぜひ、きよせラボさんに、ハウスには期待したい。そこに具体的に人に集まっていただいて、「これからの話をどうしていこうか」、「いや、防災どうするか」、「いやいや、子どもの教育どうしようか」と、そこで議論が沸き起こっていけば、ものすごい私は市民性が高まっ

ていくと、そういう場にしていただきたい。それが１つ。
　地域連携するようなところは、たくさんありますよ。例えば健全育成で老人会を入れたり学校支援本部を入れたり、いろんな機能をあそこに集まっていって、まちづくりのことを考えてみる、人育てのことを考えてみる。そういう場になると、すごく価値があるなというふうに。
　もう一つ、これは柿添代表にもお願いしたい。稼げる組織になっていただきたい。稼げる組織、ぜひ。これは粕谷委員がおっしゃった自立というところにつながることだと思うんですけれども、やはりいつかわれわれ行政の手から離れていっていただきたい。自分たちの手で、自分たちの手でまちをつくっていくという団体になっていただきたいなと、これを強くお願いしたいというふうに思います。
　まとめになったかどうか分かりません。私の最後は感想になってしまったかもしれませんが、最終的にはわれわれは八小・清小の複合型、冒頭お話ししましたけれども、これは財政効率だけのために複合型にするわけではないです。違う。われわれとしては、この複合型によってまちづくりを進めていく、複合化することによって人づくりをより一層示していく、強めていく、それのためにやる。このもう一つの理念は、われわれは絶対に忘れちゃいけないなと思いました。これをまとめの言葉に代えさせていただきたいと思いますが、職務代理者、よろしいでしょうか。

（宮川職務代理者）
　はい。

（坂田教育長）
　では司会の役、本当に不十分でございましたが、ここで私はお役御免とさせていただきます。

（瀬谷副市長）
　教育長、ありがとうございました。私も１つだけ言わせていただきます。

（坂田教育長）
　もちろん。

（瀬谷副市長）
　すごく実践の中で今いいことをやられていると思うのですが、一つ発信に向くよう

に。何か関わった人はよく分かっていると思うんですけれども、関わらない他の市民の人たちというのは、なかなかどんな活動をしているのかなというのが理解できないと思います。またコミュニティハウスの存在すら分からないという人たちはたくさんいると思います。その人たちをどうにか巻き込むことによって、市民一人一人の声がより学校に届いていくというふうになるんじゃないかと思いますので、そこのことを一つ何とか。その発信のために市ができることがあれば、当然市のほうでもしっかりと協力をしていきたいと思いますので、よろしくお願いしたいなと思います。

（柿添代表）

ここはちょうど、大切なところです。ここはタイミングも見ています。コロナ禍というのもあったんですけれどもあまり、建物の造り上もあったんです。学童さんが 2 階に入っていて入り口が片方しかないのでというのと、自動ドアがこちら側からしか制御できないというところの、管理の物理的な面があると。結果的に今おおむねもう今のリソース、人としてのリソースを使い切っているところがあるので、今希望を頂いても対応できない可能性も。なので、すいません、選択と集中でこちらがある意味選択している形で進めたところは間違いなく事実だと思います。

なので、ここの広げるタイミングである程度いったときに対応し切れなくなって、逆にそれがクレームにつながる恐れのほうが私はちょっと重く取っていて。ある意味、すいません、ここは研究棟というところでちょっと乗り切らせてもらいたいなと思ったとこあったんですけれども。ただ次年度において、そもそも発信のところ自体を、まさしく自立性なんですけれども、私たちがやったら、きよせラボがやったからになってしまうので、ここに集う人たちで発信してもらう。ここにおいては、今回私たちは運営スペースを委託いただいてさせてもらっている、清瀬市民ではありますけれども、ここはほんと市の方と協力させていただいて、ここの発信の場をつくっていきたいと思っています。

（瀬谷副市長）

ハウスは建物だけじゃないということですね。

（柿添代表）

概念的なところの説明というのは非常に、どうしても。ちょっと終わったところで。

（坂田教育長）

今日の動画なんかとっても良かったと思うから、あれをもっと出すと良いと思いま

す。

（柿添代表）
　この動画自体ができていく過程自体も、さらには集うというところに持っていける手段の一つなんですけれども、そこを私たちできている人たちが作るのは当然で、それを集う中高生達等が、コミュニティハウスとはというのが 3 つ、4 つあってもいいんです。それを全部公開してという形を、これを作りながら今回思いました。
　というのは、実はできたのも作った方はプロではない。同じメンバーで、それも 2～3 日ぐらいでこうやって作っていこうということ自体をやる。もっともホームページとかも想定はあります。あと 1 個だけ。今さっきの建物のところで、皆さん今ここの場自体もコミュニティだと私は思っていて。私ほんと自由にこんにちはができると瀬谷副市長も言われた、私はそれを清瀬で楽しく生きていますので、それが「隗（かい）より始めよ」で、他の人たちに伝えられたらばと思って。

（瀬谷副市長）
　ありがとうございました。
（坂田教育長）
　閉会の言葉をお願いできますか。

（瀬谷副市長）
　はい。ありがとうございました。いろんなことを考え、今後の課題もたくさんあると思います。今後も教育委員会と市長部局がしっかりと連携をしながら仕事していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。では以上でここの協議は終了いたします。それから（2）でその他というのがありますが、その他は何かございますか。

（坂田教育長）
　大丈夫ですか。

（瀬谷副市長）
　よろしいですか。

（委員一同）
結構でございます。

（瀬谷副市長）
はい。ないようでしたら事務局からは何か。

（戸野企画課長）
特にございません。

（瀬谷副市長）
大丈夫ですね。それでは以上をもちまして本日の日程全て終了いたしました。これをもちまして第２回の清瀬市総合教育会議を閉会いたしたいと思います。どうも今日はありがとうございました。

（一同）
どうもありがとうございました。

（坂田教育長）
瀬谷副市長、ありがとうございました。

（瀬谷副市長）
ありがとうございました。

3.